

博物館 NEWS

ニュース



● *Culture Club*

阿南市小勝島の旧海軍特攻隊基地

● 館蔵品紹介 糞石 (ふんせき)

● 普及行事参加者の声

阿南市小勝島の旧海軍特攻隊基地

山川 浩 實

はじめに

徳島県阿南市の橘湾に浮かぶ小勝島(図1)は、周囲約6.5kmの小さな島で、付近は室戸阿南海岸国定公園に指定された景勝地となっています。この小勝島には、太平洋戦争の末期、海軍が本土決戦に備えて構築した特攻隊基地がありました。

ここでは、現在小松島市に在住しておられる岡田源吉氏から当館に寄贈された「大阪海軍施設部小勝島特攻隊基地関係資料」と、茶園義男氏の研究成果、ならびに阿南市教育委員会の阿部里司氏からの御教示をもとにして、この旧海軍特攻隊基地について紹介します。

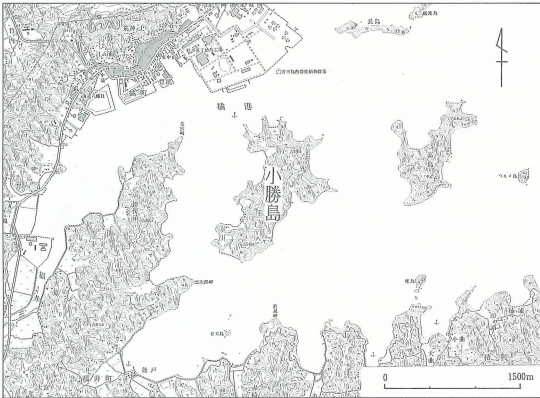


図1. 小勝島の位置

基地のあらまし

小勝島には1945(昭20)年5月ごろ、米軍の四国上陸に備えて、第6特攻戦隊第22突撃隊の司令部が置かれました。この基地には出撃命令が出れば、敵の艦船に体当たりして自爆する特殊潜航艇が密かに配備されました。この特殊潜航艇は、当初は大型の蛟竜こうりゅうが、後には小型の海竜と回天が配備されたといわれています。蛟竜は乗員5名で魚雷2本を装備し、全長26m、水中速力は時速約30kmの特殊潜航艇でした。海竜は乗員2名で魚雷2本を装備し、両翼を持ったやや低速の特殊潜航艇、回天は乗員1名の高速(時速約60km)の特殊潜航艇でした。こうした特攻攻撃への参加は強制されたもので、兵士の人命を著しく軽視した思想が生み

出した特異な戦法でした。

この特攻隊基地は、大阪海軍施設部によって密かに構築が進められました。施設部の隊員としてこの基地の構築に従事した一人である岡田源吉氏が作成した基地図、および茶園義男氏が作成した基地図によれば、特攻隊基地は島の西側に位置し、高台には見張所が置かれていました。突撃隊司令部は北西部にあつてその周りに兵舎がありました。また、南西部に特殊潜航艇の引き揚げ軌道と兵舎があり、それらの脇の2カ所に3連装の25mm機関砲が備えられていました。さらにその周辺には、5隻分の特殊潜航艇の地下格納庫、ならびに地下電気室が配置されていました。兵舎には、長さ約18m、奥行き約6mのトタン屋根の木造のもと、高さ・幅ともに約3.5m、奥行き約20mの地下壕ごうがありました。

基地の構築

特攻隊基地の構築がいつから開始されたのか、正確には分かっていません。ただ、当時の工事を監督した元大阪海軍施設部第602部隊第2中隊長の証言(1981年6月7日付け、徳島新聞)によれば、1944(昭19)年末ごろから、小勝島で基地構築のための測量などが行われたといえます。このころ戦局は一段と悪化していて、フィリピン沖海戦では日本の連合艦隊が壊滅し、神風特別攻撃隊が特攻攻撃を開始するなど、日本の敗戦が決定的

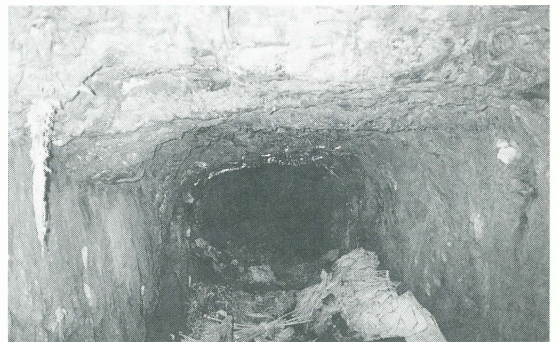


図2. 突貫工事で掘られた地下壕(1993年1月11日撮影、阿南市教育委員会提供)。

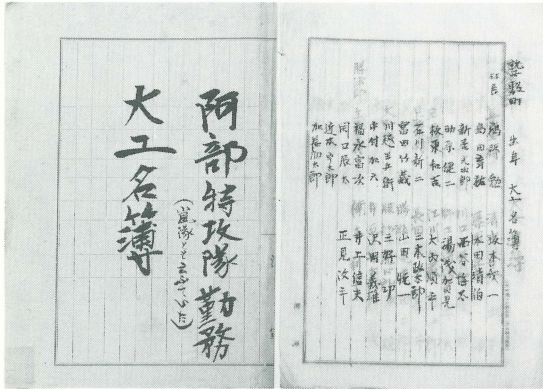


図3. 阿部特攻隊勤務大工名簿

となった時期でした。こうした状態のなかで、小勝島の特攻隊基地の構築が密かに進められたわけです。

1945(昭20)年4月から6月までの突貫工事では、昼夜3交代で50本近い地下壕が掘られ(図2)、本土決戦に備えたといわれます。この工事に当って、前記の中隊長が監督する大阪海軍施設部の隊員約80人や、基地の兵隊約400人のほか、朝鮮人労働者約200人が工事に従事しました。また、那賀・勝浦・海部郡から98人という多数の大工が徴用されました。前記の「特攻隊基地関係資料」の中の「阿部特攻隊勤務大工名簿」(図3)によれば、3つの郡の中でも那賀郡からの大工が特に多く、別名「嵐隊」とも呼ばれた小勝島の阿部特攻隊基地に、82人が集中的に徴用されました。この工事で施設部の隊員がコンクリートの厚さや強度を調査するため使用した、施設ハンマーが残っています(図4)。

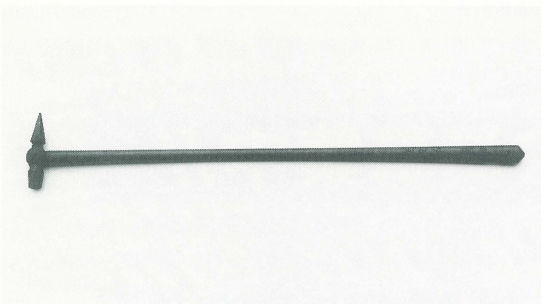


図4. 基地建設で使われた施設調査用ハンマー

このように多数の人員を動員し、密かに構築を進めた特攻隊基地は、1945(昭20)年の終戦直前、米軍にその存在を知られ、戦闘機による機関銃攻撃を受けました。岡田源吉氏によれば、当時、小勝島の対岸にあった施設部の事務所も同時に攻撃され、同氏の眼前で同僚が頸部を撃ち抜かれ即死したといます。図5の弾丸(長さ3.1cm、径8mm)がそれで、過去の戦争を生々しく語っています。

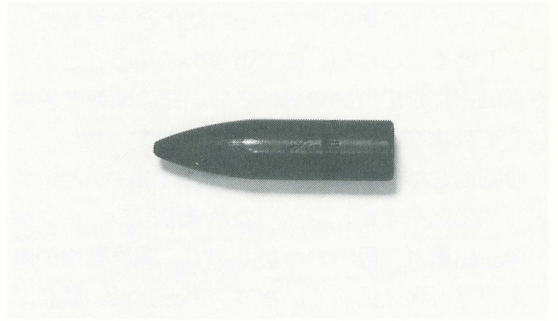


図5. 岡田源吉氏の同僚の頸部を貫通し、即死させた弾丸
おわりに

小勝島の特攻隊基地は構築中に終戦となったために、未完成に終わりました。岡田源吉氏から寄贈を受けたこの資料は、終戦直後に上官から出された機密書類の焼却命令にもかかわらず、悲惨な戦争の真実を後世に伝えるため、同氏が密かに小勝島の基地から持ち出したものです。もしも戦争が長引いていれば、この基地と付近一帯では、「特攻隊」という名のもとに極めて凄惨な戦いが繰り広げられ、多くの尊い人命が失われることになっていたでしょう。

小勝島周辺は、現在火力発電所の誘致が決定しており、特攻隊基地のあった西側一帯はすべて、削平後に発電所用地になります。そして、それとともに特攻隊基地は消滅してしまいます。戦争の事実を明瞭に示す特攻隊基地の消滅は誠に残念ですが、戦争を風化させることなく、悲惨な戦争の事実を後世に伝え、平和の尊さの意味を考えなければならぬと思います。

(当館人文課長：歴史担当)

糞石 (ふんせき)

ひとくちに化石といっても、じつに様ざまなものがああります。まず思いうかぶのは、アンモナイトや貝の殻、動物の骨や歯、植物の幹や葉などの化石でしょう。これらは生物の体の一部が化石となったものなので、体化石とよばれています。それに対して、動物の足あと、這いあと、棲管（巣穴）、食いあと、排泄物、植物の根の貫入構造など、生物の生活のあとが化石となって残ったものを生痕化石とよんでいます。卵の殻の化石を生痕化石に含める人もいます。生痕化石の多くは、生物が生活していたその場所で作られた化石（現地性化石）であることから、体化石からは知ることのできない古生物の行動や習性についての情報を提供してくれます。

今回紹介するのは、糞石 (coprolite) という排泄物の化石です。アメリカ合衆国ワシントン州の第三紀層から見つかったもので、哺乳動物の糞の化石だと考えられています。おそらく、草原で草を食べていた大型のケモノの糞が、乾燥気候のもとで乾いて固まり、やがて湖成の堆積物におおわれて、原形をとどめたまま化石になったのでしょう。表面には乾いた際にできたと思われるひび割れが観察できます。もちろん、二次的に酸化鉄の注入をうけて鉱化し、カチンカチンに硬くなっているので、臭いはしません。この標本の分析はしていませんが、一般に糞石は珪素・リン・カルシウムに富んでいるとのこと。

生痕化石の場合、比較的新しい時代のもものでは、現生の生物の生痕と比べることによって、その生

痕を残した生物が何であるか見当をつけることが可能です。しかし、古い時代のものになると、すべて絶滅した生物のものなので特定がむずかしくなります。この糞石についても、どんなケモノの糞かはわかっていません。

陸上動物の糞は化石になる機会が少ないので、お目にかかることはめったにありませんが、海底に積もった泥の層を注意深く観察すると、いろいろな動物が残したペレットとよばれる糞粒が無数に見られることがあります。それらの糞化石を調べて、それらの動物がどんな内臓をもち、何を食べていたかを明らかにする研究も行われています。最近では、考古学の発掘においても“トイレ考古学” とよばれる研究手法が生まれ、遺物や文書からはわからなかった古代人の生活様式の解明に古代人の糞が一役買っています。余談ながら、私たちの糞は水洗トイレなどで跡形もなく処理されてしまえば、将来の糞石学の対象にはならないものと安心しておきましょう。

(地学担当 両角芳郎)



哺乳動物の糞石 (左右の長さ20cm)

平成6年度

博物館友の会会員募集中!!

会員になって、活動しませんか。

くわしくは、徳島県立博物館友の会事務局までお問い合わせください。Tel. (0886)68-3636

遺跡などから出土した遺物は、必要に応じてさび取りや樹脂含浸などの保存処理が施され、展示や調査研究の材料となります。保存処理は、破損状況や材質によってさまざまな方法を使い分けるため、処理の前に内部のようすや材質を調べる必要があります。しかし、文化財を壊したり傷つけたりすることはできないので、壊さずにすむ方法で調査しなければなりません。

文化財を壊さずにその材質を調べるためには、けいこうエックスせんぶんせきそうち 蛍光X線分析装置（図1）を使います。蛍光X線分析というのは、物質にX線をあてると元素ごとに特有の二次X線（蛍光X線）が発生することを利用して、元素の種類と量を調べる方法です。この装置は、ふつうはごく小さなものしか分析できないのですが、博物館では大きな文化財を壊さずに分析できるようにするため特別に開発したものを使っています。

この蛍光X線分析装置を使って阿南市山口町から出土したと伝えられるちやうじやがはら どうたく 長者ヶ原1号銅鐸（図2）の材質を調べてみた結果が図3です。この図で山



図1 大型文化財も分析できる蛍光X線分析装置



図2 長者ヶ原1号銅鐸

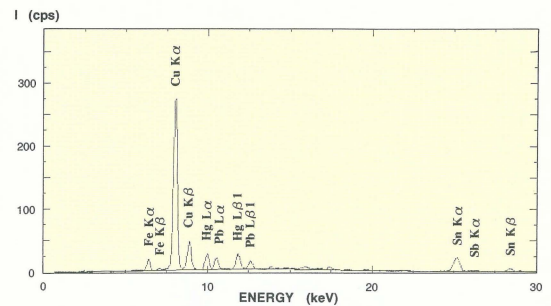


図3 長者ヶ原1号銅鐸の分析結果

のように高くなった部分が検出された蛍光X線を示し、この位置を調べることで元素の種類を知ることができます。

この結果から、銅鐸は銅、どう 錫、すず 鉛を混ぜ合わせた青銅という金属でつくられていること、表面のところどころに付いた赤茶色の顔料は辰砂しんしゃとベンガラを含むものであることなどがわかりました。

このように、この装置を使うと文化財を傷つけることなく保存処理や調査研究のための貴重なデータを得ることができるのです。なお、この銅鐸は総合展示室の銅鐸のコーナーに展示されていますので、一度じっくりと観察してみてください。

（魚島純一）

博物館をとりまく活動

天皇陛下の行啓

10月23日、東四国国体の秋季大会にともない、天皇陛下がご来館されました。午後3時35分、文化の森中央広場の噴水前にお着きになり、亀井館長、天羽副館長の案内で博物館をご覧になりました。展示の全体についてたいへん興味をもたれ、随所でいろいろとご質問をされました。

写真は、銅鐸をご覧になる天皇陛下と説明の館長です。このあと、銅鐸に描かれた絵に興味をもたれ、「トカゲとあるガイモリではないか？」などご質問されました。



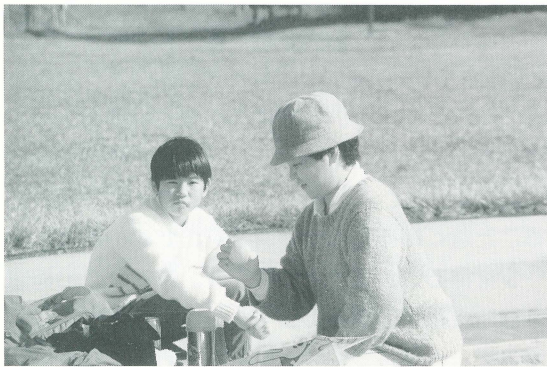
普及行事参加者の声

西川洋子さん（堀江北小学校 4年生）

私が初めて博物館の行事に参加したのは「ミクロの世界」でした。ふつうのけんぴ鏡とちがって、拡大した物がテレビの画面に出るので、みんなが一度に見えます。でも、色が白黒なので、本当の色は見えません。倍りつを下げると形は分かるのに、倍りつを上げていくと何なのか分からなくなります。とつても不思議です。あんなに小さいノミも、目や耳がちゃんと分かります。でも、目はあるだけで、役にたたないそうです。今度見てみたい物は、目に見えないもの（手についているばい菌など）です。

他に参加しておもしろかったのは、「植物たちの秋」です。林の中の植物や、こん虫をかんさつしました。ドングリを拾って、これが何の木、あれがこの木と、調べました。いろんな形があったけど、一番おもしろかったドングリは、クヌギでした。それは、さかさまにすると女の子がかみの毛をカールしたみたいに見えたからです。クヌギとシイの実をくらべてみると、6倍ぐらいもちがいました。ドングリや、草の実はたくさんあったけど、虫があまりいなくて、ミツバチしか見られなかったので、残念でした。

私は、これからも、できるだけ博物館の行事に参加したいです。



大北和美さん（徳島大学 4年生）

博物館の普及行事として、いろいろな催し物が行われています。私が参加した「土器づくり」もその中の一つで、大変人気のある催し物です。小学生が一番多かったのですが、中学生や大学生、おじさん、おばさん等、幅広い年代の人々が参加していました。

土器製作の手順や説明を聞きながら、前の机の上に置いてある土器や写真の土器を参考にし、思い思いの形の土器を作っていました。できあがった作品の中には、古代の人々が製作したような、均整のとれた見事なできばえの土器もありました。

私は大学で考古学を勉強しているので、土器に触れ

る機会が人よりは多くあります。しかし、実際に自分の手で作ることによって、見るだけではわからなかったことが多くあるのに気付きました。

焼成が、雨天のため出来なくて残念でしたが、こうした、“自分の手で作る”といった催し物が増えたら良いのに、と思います。



吉村博子さん（徳島市大原町）

私は、「文化の森」博物館ができて以来、子供達と一緒に様々な行事に参加して楽しませてもらっています。行事に参加して、「こんなこともあるんだ」と、命の仕組や自然の不思議さに驚き、そして人間の知恵や数々の工夫を教えてもらって、いつも得たような気分になります。ただ残念なことに、年のせいばかりではないですが、すぐに忘れてしまうこともあるのですが、でもだからこそ、いつも新鮮な気持ちで聞けるんだと自分をごまかし、土器やレプリカ作りのような体験学習では「お母さん、形が変だよ」という声にもめげず、参加当選ハガキをワクワクしながら待っています。現在の展示室と違って、昔の博物館のあのカビ臭いような独特の匂いに包まれて、何があるのかなとドキドキしながら見て回った、若かりし頃の気持ちと同じです。準備される方は大変でしょうが、知る喜びを教えてください。普及行事、これからも期待しています。





レファレンスQ&A



Q 古代の土器にはどんな種類があるのですか？
また、どのようにしてつくられたのですか？

A 土器づくりは人間が初めて知った化学変化であるとよく言われます。粘土を焼いて、より安定したものへと変えてしまったのです。

日本では、約1万2000年ほど前に土器づくりが始まりました。土器は、その使われた時代によって、縄文土器、弥生土器、土師器などと呼ばれます。最初の縄文土器は、煮炊きを目的としたもので、底の深いものが多く見られます。弥生土器、土師器と新しくなるにつれて盛りつけや貯えなどの用途に適した形の土器もつくられるようになりました。

土器のつくり方については、遺跡から出土する土器に残された情報ばかりでなく、じつさに土器をつくってみることで、新たにわかることも多いのです。これらを手がかりとして古代の土器づくりを復元してみましよう。

土器をつくる粘土は、古代の人びとがくらししたムラの近くで手に入れたものです。粘土のねばりけを調節するために、長石、石英な

どの鉱物が混ぜ込まれました。古い縄文土器のなかには植物の繊維が混ぜられたものもあります。粘土をよく混ぜ十分にこねて、ある期間ねかせました。

土器は、まず底にする円板を作り、ひも状にした粘土を積み上げて形づくられました。小さいものは底から口まで一気につくられましたが、大型のものは5・6回にわけて途中で乾かしながら積み上げられたようです。表面はヘラ、板材、貝殻などを使って削ったり、なでたり、磨かれたりしました。最後に縄文や櫛描文などの文様がつけられました。

十分に乾かされた土器は野焼きされました。地面を簡単に掘りくぼめるか、地面でそのままマキを燃やし、水分が上がらないようにして焼かれました。その温度は500℃から900℃くらいでした。時代のうつりかわりとともに、形や文様を大きくかえた土器ですが、粘土を積み上げてつくる方法と焼き方はほとんど変わらなかったようです。

(考古担当 高島芳弘)



本の紹介

岩波ジュニア新書89

奈良・京都の古寺めぐり

仏像の見かた

水野敬三郎 定価600円



平成5年11月25日、奈良東大寺の南大門前で、仁王像の落慶法要が行われました。これは鎌倉時代につくられた国宝の仁王像を6年かけて修理し、その完了を記念したものでした。横綱の曙が仁王像の前で土俵入りする姿が、テレビニュースで放送されましたので、ご記憶の方も多いかと思います。そこで今回は、仏像の入門書から一冊選んでご紹介します。

岩波ジュニア新書の『奈良・京都の古寺めぐり』は、青少年向けに書かれた仏像の入門書です。著者は東京芸術大学の教授で、仏像の研究にたずさわっているこの道の第一人者です。やさしい言葉を使って分かりやすい内容になっていますので、仏像の歴史を知りたい人には格好の入門書であるといえます。

以下にこの本の特色を述べてみましょう。まず、取り上げられる仏像はあまり多くありません。それぞれの時代を代表する仏像をしぼって、造られた時代、表現の特色、歴史上の位置づけを、やさしい言葉で分かりやすく述べています。とくに表現についての説明は、やさしく書かれていますが、著者の長年の経験にささえられて読みごたえのある内容になっています。そのため一つの仏像について、じっくりと学び、理解することができます。

またこの本では、作品ごとに話をまとめていますが、その歴史的な説明の部分を通して読んでいくと、飛鳥時代から鎌倉時代までの仏像の流れが要領よく分かります。仏像の歴史がどのように考えられているかは、専門でない人にはむずかしいことですが、著者はもっとも重要な点を、かみくだいて述べていますので大変参考になります。

この本が出されたのは昭和60年ですが、ほかのものとは一味ちがう入門書として今でもさかんに読まれています。

(大橋俊雄)

2月から4月までの博物館普及行事

あなたも参加してみませんか?

シリーズ	行事名	実施日	実施時間	対象(人数)
室内実習	地質図づくり	2月6日(日)	13:00~16:00	中学生から一般(30人)
	レプリカづくり(型どり)	2月13日(日)	13:00~16:00	小学生から一般(30人)
	レプリカづくり(色づけ)	3月6日(日)		
	ミクロの世界	2月20日(日)	10:00~11:30 13:30~15:00	小学生から一般(各回10人)
野外自然かんさつ	磯の動物(県南)	4月10日(日)	10:30~12:30	小学生から一般(50人)
土曜講座	*昆虫の食べ物	2月12日(土)	14:00~15:00	一般(50人)
	*日本の工芸・蒔絵	3月12日(土)	14:00~15:00	小学生から一般(50人)
	*恐竜の世界	4月9日(土)	14:00~15:00	小学生から一般(50人)
ミュージアムトーク [旅]	*霊場と旅	2月9日(水)	14:00~15:30	小学生から一般(50人)
	*旅と情報	3月9日(水)	14:00~15:30	小学生から一般(50人)
歴史散歩	国府町の遺跡めぐり	3月20日(日)	13:00~16:00	小学生から一般(50人)

●*は申し込み不要です。その他は往復はがきでお申し込みください。(各行事の1カ月前から10日前までに届くように)

❀10月から12月までの行事は、全部で13回行われました。参加者は424人でした。

❀10月31日(日)に体験学習「土器づくり(成形)」が行われました。参加者は、縄文土器、弥生土器の特徴などを聞いたあと、粘土をこねて、おもいおもいの形をつくっていききました。縄文土器の複雑な形や模様に取り組む人もいました。

❀11月28日(日)には、野外自然かんさつ「県南の植物かんさつ」が行われました。徳島駅をバスで出発し、日和佐町干羽海岸でシオギクを観察したり、リュウノギク、ノジギクとの違いやその分布な

どの話を聞きました。海部町奥浦の明現神社では、県指定天然記念物のヤッコソウを観察し、からだのつくりと増え方について学習しました。



文化の森紹介展

文化の森にある5つの文化施設の特徴が一覧できる展示会を、相生町で開催します。博物館というみなさんは常設展や企画展とか、講座や観覧会を思い浮かべることでしょう。でも、博物館ではこのような展示や教育・普及活動以外に、調査研究や資料収集といったさまざまな活動を行っています。文化の森紹介展では博物館の活動を紹介し、日頃わからない博物館全体の姿をみなさんに知っていただきます。ぜひお立ち寄りください。

◇会場 相生森林美術館

◇会期 平成6年3月11日(金)~13日(日)
(入場時間: 9:30~16:00)

◇観覧料 無料

◇講演会 (申込み不要)

「ナカガワノギクと日本の菊」

講師 小川 誠(当館学芸員)

日時 3月12日(土) 13:00~14:00

「那賀川流域の縄文遺跡」

講師 高島芳弘(当館主任学芸員)

日時 3月13日(日) 13:00~14:00

博物館ニュース No.13

発行年月日 1994年1月10日

編集発行 徳島県立博物館

〒770 徳島市八万町向寺山 ☎(0886) 68-3636